

想

随



犬への愛情

八木鉄男

七〇年代は深刻な危機的問題をはらみつづ進行している。このまま進めば、二一世紀は人類にとって絶望の世紀となるかもしれない。しかし、こんな時期であればこそわたしたちは張りつめた生活の片隅に、つ

ねに余裕を持ちつづけていたものだし、また、そうすることがむしろ必要なのではないだろうか。こんなことを考えると、なぜか、わたしは、あのウィーン会議の舞台となったシェーンブルン宮殿の背後にある静かな美しい森の散歩道で、リスに食べ物をあたえていた一人の老姿を思い出す。老姿の顔が余りにも幸福そうであつたからである。

わたしは、幼い頃から犬が大好きである。小学生の頃からわたしのそばにはいつも犬がいた。戦争中もそうであつた。学徒出陣の際、わたしの愛犬は母にだかれて駅頭まで見送りに来た。復員した時には、その犬は老令のため、すでにこの世にはいなかったが、あの駅頭で淋しそうにわたしの頬をなめた顔つきは今でもおぼえている。戦後三年ほどたつて、また犬との生活が始まり、今までずっとつづいていいる。

人と犬とのつき合ひは、八千年ないし一万年前にさかのぼるといわれている。以来人と犬とは愛情のきずなで結ばれてきた。愛情のきずなは互いに相手を理解し、信頼するところに成立する。人と犬の場合も

そうである。

最近のペット・ブーム。犬を飼う家庭は増加した。超小型犬が流行の波にのっている。そうかと思えば、一方では2DKのアパートでセント・バーナードと暮らしている人もある。しかし、本当に犬を理解し、犬に愛情を持つている愛犬家なら御存じのはずである。幸福そうな顔をしている犬とそうでない犬とがいることを。新聞紙上には、しばしば野犬の被害や、また飼犬が子供を傷つけたという記事がのっている。それは飼い主の責任である。子犬のときは可愛かったが大きくなったら、やかいになつて捨てた、信頼していた人間の愛情から離れた犬は、野性に戻らざるをえない。また形式上飼われていても、欲求不満の蓄積が犬を荒々しくする。人間だつてつねに不満にみちみちているこの世の中、といえはそれまでである。しかし、犬もつねに幸福を求めていることは否定できない。酷暑の日中に、水もあたえずに短かくくりにつながれて道路にほり出されている犬、寒い冬の夜、雨にうたれたまま軒先でうずくまっている犬、わたしはそんな犬を見ると

飼い主に対してむしろ腹立たしくなる。こんなことをするのなら、はじめから犬を飼うなどなりたくない。

犬の気持を理解して、人間の良き友である犬に愛情を傾ける心、それは世界平和への願いとも通ずるとわたしは思っている。犬を愛するわたしのたんなるたわごとにすぎないだろうか。

（大学法学部教授・法哲学）

技術者の言葉・図面

坂口 一彦

音楽家は自分の意志や思想を表現するため、文字のほかに記号を用いる。人間は一般に文字や言葉により意志、思想、感情を表すが、技術者は技術的情報を、より正確に伝達するため図面を用いる。すなわち図面は技術者の言葉といわれている所以である。

図面の起源はギリシャ時代に始まり、当時すでに幾何画法であるが見取図が画かれている。また一五〇〇年頃、レオナルド・ダ・ビンチの画いた機械の図が現存している。このように図は古くより、人間の生活と切り離すことのできない言葉の一つとなっている。

本学の機械系学科においても、学生は一回生より図とかかわりを持つ。二、三回生と進むにつれて難易度の高い製図をすることになる。現在のカリキュラムにおいては、製図関連科目はほとんど必修となっており、修得しなければ卒業ができない仕組みになっている。

振り返ってみると硯の墨により烏口で製図をした時代から、ロットリングなどを用いる現在、また学生の気質も、わずかの失敗でも紙を破り捨てて時代へと移り変わってきた。製図を行うには長時間を要する場合が多いが、提出の締切間際になって書き始める学生が多いのはいつの時代も変わらないようである。

製図においては、製品の強度的な問題、構造上の問題、経済的な問題などについて

は理論に基づく諸計算により形状、寸法が決定されるが、部分的には経験と感覚によるところもある。また特殊な技術、道具を用いることはない。現在本学の機械系学科では約二〇〇台の製図板、ドラフタを設置し、ひじょうに充実した製図室をもっており学生が自由に使用できるようになっている。大学によっては製図を選択科目としている。しかし技術者の言葉を教えないということはどうかと思う。機械の設計図はもちろんのこと電気の配線図、建築の設計図といったように製品を完成させるためには図面は不可欠のものである。基礎図法を修得したのち、実務経験を二、三年も積み一人前の設計技術者となっていく。

図面は万国共通の技術者の言葉で、技術革新が行われても基礎図法は依然として変わらない。たとえ手法が変わらなくとも、前述の諸計算の技術がコンピュータなどの導入により、合理化、高速化されたため製品の製作時間は大幅に短縮されているのが現状である。たとえば四十万トンタンカーであれば約三ヶ月程度で一隻完成する時代になっている。これも技術革新の成果であ

るう。

技術者にとつては日常の言葉と同等に大切な言葉として図面がある。これらの知識を吸収することにより新しく言葉を知ることとなる。

(大正工学部助教・設計製図)

旅のインド

深 田 進

旅は、私にとって、その旅について想い描いた有りようを、時と足に身をゆだねてひとつずつたどることであり、旅へのこの想いのなかの場所場所が実際に現れ出てくる驚きや喜びが、旅する私の発見である。その場所が私の想いとかけ離れていることも多いし、どうにも想い定めきれないものどかしい気持で、初対面を果たすことになる場合もある。あれからもう二年の余になるインドのときがそうだった。

旅への想いといっても別段、大それた予備知識の類を言うのではない。たとえば、昔そこへの旅を夢みていた信濃なら、早春であり、溶け残った雪が落葉樹の黒い根元に光っているのがみえればいい。パリなら、舗石の音、スペインなら、とある白亜の小さな扉口をすり抜ける瞬間を、ふと足裏や肩先に想えれば、それでいいのだ。ルーヴルやアルハムブラが、ごく自然に、それに連なってくる。

しかし、想いを半ばに絶たれたままの私に、乾期のインドが現れたのは、現れとは言い条、私の感覚にとつてははなはだ混乱的というか、その太陽の下で見える風物の個々の有りようの強烈さが、かえって実体が見えずに他にあるのではないかといった、不安の念を背中あわせにしたものだった。いきおい私の旅の感覚は、インドで物が眼にみえ始め、またみえなくなる、朝と夜に、生々しい充実を感じだした。つまり歩き、群れ、躊り、エビのように横たわって動かない人々や、祭のお寺の音や臭いなどの氾濫をとまかくおのずとつみこんでいくもの、カルカッタのような大都会にも

オーランガバッドのようなデカンの村にも遍在して、旅人を疎外する実体を欠いた感覚の不安を鎮めるのが、朝の光であり、夜の闇なのだった。日中、間断なく私をとりまいて圧迫する物々、人々にくらべて、およそはるかな観念の高みにあるヴェーダの一節の方が、今にも踏み潰されそうな感覚の尺取虫となった私には身近だった。眼という、離れて物の現れをみる感覚装置への信頼が相対的に減弱するとともに、手や足や皮膚感覚、つまり渾然となった全身体を膨ませて索り歩ける場所としてインドの現れたのが、エローラの夜であり、ベナレスの暁だった。

それは、「まぎまぎと黒き厚さ増しくる夜の闇はわれに近づく」ときだった。また朝まだき、「今し昇りくる天空の黄金の珠よ……太陽神スリーヤによりて目覚めたる人々の、一日の途に就きて自が業はたさんとするは今なり」とでも言いたげに、無数の鴛や鳥が高らかに鳴き立てて、私の眠りを破ったときだった。そのとき、ベナレスの街頭に動く人氣はなく、ベッドのなかの私の意識は未だ夢と現のあわいにあつたが

やがて、覚醒の奇異さに肌寒さを感じた。鳥たちの転生の唱といおうか、いずれも解せないこの地の言葉に似た鳥語をとおして、確かにある生々しい実在の物語を私の意識は感受していた。その感覚のなごりだろうか、一頭の犬が横切る真昼の広場で、私は、影だしい人間と動物たちの生きざま死にざまの光景が宙にひしめいているのを見たとおもった。

旅は、私にとって、旅した想いのなかからこんな風に三たび現れてくる。

(大学文学部囁託講師・芸術学)

随 想

元 井 叶

動物を愛する人は多く、とりわけ多くの人に愛された犬は、今では現代人の好みにあうように改良を加えられてきている。同種であってもその形態等は時代と共に変化

し、最近ではショードッグの傾向が著しく、御婦人のアクセサリーとして登場するものまである。

大の愛犬家である中条先生はドーベルマン党である。あの精悍なマスク、サラブレッドに似た体型、ピロードのような被毛や軽快な歩き様等が先生をとらえているのであろう。先生は最高の血統にふさわしい、徹底した飼育管理を望まれる。御自分の考案された合理的な大舎で犬は常に清潔を保たれ、特に被毛の手入れは念入りで美しく磨きあげられている。概してドーベルマン党はその華やかさ、シャープさにひかれる貴公子タイプの人に多いようである。それに反してややラフでヌーボリックで渋さを好む人は、エアデール党である。阪大工学部の川井先生は数頭のエアデールを飼育しておられる。奥さんはワイヤー党のため気の強いワイヤーの喧嘩にまきこまれて、いく針か縫う怪我もししばしばである。教授が英国のベンガル犬舎を訪ねて選ばれた仔犬は現在日本チャンピオンとして犬界に君臨しているが、先生はこの犬のブラッキング、トリミングはもとより、時には展覧会のハン

ドラーも御自身でされるといふ身のいれよう。先生の立派な邸宅の芝生は跡かたもなく、部屋の内外部もあらされて客用のスリッパも新調の憂き目にあう。先生の家で生まれた犬は利口で温和である。血統はもちろん御夫妻の愛情が犬に伝わり安定した情緒をもつようになるのであろう。性質の悪い犬は飼主にも責任があるようだ。以前、小生の近所に始終つながれている犬がおり、散歩の途中かならず吠える。わが家の犬はお人好しで、どんなに吠えられても相手にしないのだが、この家の近くに來ると、きまって緊張して敵意を示す。「犬にも美しいことはときたないことばあるのだよ」と言って失笑をかったが、つながればなしの欲求不満から、他犬をのしることに生きがいを感じているのではないだろう

か。

犬界からのぞいた日本人気質と英国人氣質について一言すると、英国人は仔犬の時は高カロリーを与えるが、成犬には驚くほど粗食をさせるが、他方タマネギなどは、ばりばり与えて、真の健康管理には留意している。またその環境や運動にもたいへん

氣をくばっている。日本では高価な犬は、猫かわいがりされているのではないだろうか。権威好きと合理好きの現われともいえよう。トリミングを必要とする犬でも、日本人は速成で出陳する場合が多いが、英国人は一年位前からこつこつ計画的に準備をするようだ。二年ほど前英国の中学に転校した生徒からもらった夏休み前の手紙に『今、わたしたちはクリスマスに行う劇の練習にはげんでいます』とあつて驚いたが、考えてみれば人界においては言わずもがなのことであつた。

犬の審査では日本の場合、たとえば審査評は、『本犬の各部は均整的且補償的、頭部貴相を呈し、尾の保持良く乾燥度も高い。歩き様は軽快且伸展性に富む……』となる。英国では、『この犬は立派な犬だが、私にはどうもアップルしない』程度で、至って簡単に出陳者もそれで納得している。それだけ審査員に対する信頼度が高いのだらう。あるいは、合理的飼育や訓練が、最終的にはひとつの品位、犬格を生むための過程であることへの暗黙裡の了解がなりたっているのではないだろうか。犬界に関する

限り、わが国はまだまだ遅れた点が多いと思われる。しかし、これもケンカイの相違ということになればそれまでである。

（女子中・高教諭・國語
元日本警察大協会審査員）

随 想

今 城 淳 行

先日、久しぶりに西山の光明寺へ行った。我が家から徒歩で三十分ぐらいの所にある。西山の丘陵地帯をほとんど覆いつくしているのではないかと思われるほど、果てしない広がりを見せる孟宗竹の簾の中を小徑伝いに歩いて行く。秋の日ざしを楽しみながら歩を進めると、時々新しい住宅地などが現れるが、バス道路に出るまでは、人影もめつたに見ない。

紅葉の季節にはまだ少し間があるのに、もみじの名所である寺はもう参拝者、観光客の群れをそここに見かけた。

私はこの寺の総門から本堂へと導く、ゆるやかな勾配の参道が好きである。ごろた石と細長く切り出した御影石の、どこにでもありふれた素材の組み合わせが、驚くほど洗練されたのびやかな造型美を創り出し、冷たい石の集まりでありながら、訪なう人々を暖かきをもつて迎え入れてくれる。ちょうど、法会の日であつたのか、敷地内に点在する御堂はどこも仏事を営んでいた。御影堂と名づけられた本堂では数人の僧侶が居並び、読経の最中であつた。

鮮やかな緋色の衣をまとい、中央に座しているのが一番の高僧であろうか、はるかかなたに見えるその小柄な姿は、本堂内部の奥行きのある空間をよけいに広々と感じさせ、低く通つてくる枯れた声は、外部のざわめきから隔絶された堂内の静寂をきわ立たせていた。立ったまま眺めるのは、いささか非礼であらうし、正座して見守っていたが、ふと本堂広縁からの入口を気にし読経の最中にこちらを振り向く一人の僧に興さめる思いがして、黒衣の僧一人一人の後姿をあらためて眺めれば、残念ながらそこに気品を感じさせる姿は無かつた。大半

は長髪である。人の髪は実に豊かな表情を
持っていて、普段そのように意識して眺め
ることはしないが、生身の人間の俗性をま
ともに現すだけの表情を備えていることに
思い至る。仏教の宗派については全く無知
だし、いつごろから長髪が許される派がで
きたかも知れない。しかし仏僧の頭上にの
った髪は、俗界に未練たつぷりのありさま
を見せて、求道者というイメージは遠ざか
る。突然、衣の袖をなびかせてスクーター
を走らせる姿が脳裏を去来した。

立ち去ろうとして振り返ると、御堂の一
隅にジーパン姿の若者たち数人が居た。皆
行儀よく正座してかしまっている。彼ら
に正座の姿勢をとらせたのは何だろうか。
彼ら自身、信仰心の厚い若者の群れであっ
たのか、儀式自体にその力があつたのか。
私はここが新興宗教か何かの、鉄筋コンク
リート建ての豪華な大広間だったら正座し
ていなかったらうし、断定はできないが恐
らくその若者たちもそうだっただろう。古
びた建物は一七五三年に再建されたものと
いわれているが、総檜造りの建物は、手入
れのよさによるとしても、二百二十年の歳

月に風化すべきは風化して、なお厳然とそ
の骨格をくずしていない。鉄筋の建物もレ
ンガ造りも寿命は平均およそ百年、近ごろ
の一般木造住宅などたかだか三十年である
ことを思う時、こういった木造建築が、そ
のうちそとに自ら備える荘厳さは、屋根の
高さや柱の巨大さによるものだけでは無い
ことに気づく。部分的な補修は繰り返され
ているだろうが、それらを含めて御堂はそ
の寺の数百年の歴史の重みをゆるぎなく受
け継いできたことを静かに語りかけてく
る。屈託の無い若者に、威儀を正させたの
は、法会の営まれた場合自身がその内に蓄え
てきた威厳ではなかったらうか。

昨年暮れ、小さなドイツ製のカーベツト
を買った。庶民的で平凡なものであるが、
私は一目で気に入った。およそ無愛想とい
うか素朴というか、極めてじみな色であり
デザインであるが、その、人に媚びる所の
無い、しかも底からにじみ出してくる暖か
みにひかれたのである。派手な色彩で材質
や製造工程の粗悪さをこまかすような所は
みじんも無い。逆に素朴自身が持っている
質感や、堅実な製造工程そのものが価値と

なっている。造っても満足できなかったら
ないし、でき上がっても、気に入ってく
れる客が現れなければ売れなくて結構とい
わんばかりの、どこか一徹な職人気質が読
みとれるようなしるものである。中に織り
込まれた単純で大らかな模様を見ていると
北欧の木造家屋の窓や、石造りの古い教会
の入口などを連想する。太い木材で縁取り
した窓枠や、角な切石で縁取りした入口な
どである。奇をてらわれないデザインは、例
えば日本の民芸などがそうであったように
長い年月、民衆の中に息づいてきた生活様
式とか、それらを支えている風土とかが生
み出したものである。民衆の生活の歴史と
いうようなものに裏打ちされた品物は、年
月と共に愛着の深まりを覚えるのではな
からうか。時々疲れた頭を休める時は、その
カーベツトの上にあぐらをかく。窓から差
し込む光の移り変わりと共に見える、微妙
な色調の変化に目を止めながら、光明寺の
古い、がすばらしい参道や風雨にさらされ
た本堂の分厚い檜の広縁を想い出したりす
る。